経済研究
Vol. 73, No. 4, Oct. 2022

【書　評】

杉　原　　薫 著

『世界史のなかの東アジアの奇跡』

名古屋大学出版会　2020.10　vii＋765 ページ

I.

本書は，東アジアの奇跡に焦点を当てた世界史を1990 年代後半以降盛んになったグローバル・ヒストリー研究との交流にもとづいて描いた，著者のライフワークというべき重厚な作品である．同時に，本書はグローバル・ヒストリー研究の国際的潮流の一部を成す力作とも言えよう．本書における議論は多岐にわたるが，その根底にある問題意識は，「ヨーロッパの奇跡」に偏った西洋中心史観を根本的に見直し，東アジアの重要性を議論した「東アジアの奇跡」の世界史を構築することにある．そのことによって，歴史学における国際的な対話を促進する意図があるという．

著者によれば，西洋近代の成立は「生産の奇跡」を生み，東アジアの高度成長は「分配の奇跡」をもたらした．これらは，資本集約的な西洋型，労働集約的な東アジア型とも言い換えられる普遍性を持つが，著者が描こうとする包括的かつ俯瞰的な世界史は，両者の対立によってのみ特徴づけられるものではない．この 2 世紀にわたって，後者が前者から影響をうけながら経済システムの再編と融合を繰り返してきた軌跡を描くために，著者は東アジア型の発展径路の普遍性を検討し，それがいかなる国際経済関係の中で西洋型を融合・再編していったのかを多面的に考察している．本書で壮大なパースペクティブによる議論が展開されていることは，本書の目次が示すとおりである．

序章　東アジアの奇跡の意味するもの
第 I 編　東アジア型経済発展径路の成立と展開
第 1 章　勤勉革命径路の成立
第 2 章　労働集約型工業化の成立と展開
第 3 章　資源節約型径路の発見
補論 1　南アジア型経済発展径路の特質
第 II 編　近代世界システム像の再構築
第 4 章　近代国際経済秩序の形成と展開―帝国・帝国主義・構造的権力―
第 5 章　近代世界システムと人間の移動
第 6 章　19 世紀前半のアジア交易圏
第 7 章　世界貿易史における「長期の 19 世紀」
第 8 章　東アジアにおける工業化型通貨秩序の成立
補論 2　イギリス帝国主義・シティー・工業化の世界的普及―ケイン・ホプキンズ『ジェントルマン資本主義の帝国』の射程―
第 III 編　戦後世界システムと東アジアの奇跡
第 9 章　アジア太平洋経済圏の興隆
第 10 章　東アジア・中東・世界経済―オイル・トライアングルと国際経済秩序―
第 11 章　中東軍事紛争の世界経済的文脈―石油・兵器・資金の循環とその帰結―
第 12 章　戦後世界システムとインドの工業化
第 13 章　グローバリゼーションのなかの東アジア―1990 年代の軌跡―
補論 3　熱帯生存圏と「化石資源世界経済」の衝撃
終章　総括と展望

目次を一瞥しただけでも，本書が多様な時空間をカバーしていることが分かるが，上述の通り，著者の一貫したねらいは西洋中心史観の相対化，ならびに工業化の歴史全体の再検討にある．著者によれば，そもそも東アジア型発展径路が存在し，それはウエスタン・インパクトで破壊されたのではなく，むしろ息を吹き返し再編された．欧米から導入された技術や制度が融合したことにより，アジアでは総人口の持続的増大と一人当たり所得の増加が可能となったのである(分配の奇跡)．そこでは，資本集約型や労働集約型といった分類にみられる工業化のあり方を規定する要素賦存(土地・資本・労働)に加えて，エネルギーと水も重要な要素として位置づけられるべきだと提起される．さらに本書は，工業化をキーとして西洋中心史観を相対化することによって，西洋近代の成立に新しい意味を見出し，地域史の枠を超えた東アジア史を世界史の中に位置づける試みでもある．

以下，II においてはポイントを紹介し，III では今後の課題と感じた点を述べたい．本来ならば II で，各章の詳細を議論したいところであるが，本書が

765ページにのぼる大著のため，要点に絞って以下で論ずることにする．

II.

序章は，20世紀に生じた東アジア(日本，NIES，ASEAN，中国，東南アジア諸国)で起こった高度成長と生活水準の上昇，すなわち「東アジアの奇跡」が，イギリス産業革命を生み出した「ヨーロッパの奇跡」に比べて，世界人口に対してはるかに重要なインパクトを与えたという著者の問題提起から始まる．近代経済史におけるこれまでの研究は，①西洋工業化にもとづく「収斂説」，すなわち西洋型発展径路の拡大・普遍化の歴史，②後進国における「構造主義」，すなわちすべての国や地域が平等に発展することはあり得ない，という主張だった．それに対して，著者が提示する第三の見方は，①と②の先行研究の貢献を認めたうえで，「東アジアの奇跡」という経済史的「事件」に着目する，「複合径路融合説」という新たな視点である．すなわち，20世紀後半の東アジアでは，西洋型と東アジア型が「融合」することによって，急速な工業化が可能となり高度成長が起こった．

西洋型，東アジア型の工業化は，それぞれ資本集約的，労働集約的によって特徴づけられる．前者はイギリス産業革命に代表され，後者は戦前日本が西洋技術を選択的に導入し日本化させていったことが想起される．これらに加えて著者は，石炭や石油などのいわゆる省エネ，すなわち「資源節約型径路」という特徴を戦後の東アジアの発展から見出した．かつ対照的に論じられている点は，イギリス産業革命に始まる西洋型の工業化が，化石資源を多く利用し，さらに新大陸の存在に依っていたことである．鉱物資源へのアクセスの有無が工業化の方向性に影響を与えた点については，もっと強調されてよいというのが著者の主張である．

さらに戦後のアジア太平洋経済圏の興隆は，東アジアが世界経済の中心となるだけでなく，貿易，資本移動，技術移転を通じて世界経済のダイナミズムの中心となり，20世紀後半の世界経済に大きな構造変化をもたらした．特に強調されているのは，アジア太平洋貿易が，19世紀以降の国際分業体制の性格を根本的に変えたことである(国際分業体制の大転換)．著者によれば，欧米による工業品輸出と残りの世界が一次産品を供給するという従来の体制から，アジア型労働集約的技術とアメリカなどの資本集約的・資源集約的技術の融合により，アジア間貿易をエンジンとする工業化型貿易の爆発的成長が起こった．

この東アジアの奇跡を支える鍵となったのが，冷戦体制の成立がヨーロッパの優位を崩し，かつ米ソの技術革新が資本集約的・資源集約的な方向に向かったことにあり，結果として労働集約的・資源節約的な工業化の機会が東アジアに与えられたのである．さらに，日本を起点として雁行形態的に発展する東アジアにおいても新しい国際分業体制が構築され，日本が資本集約的・技術集約的産業に特化し，他のアジア諸国は労働集約的産業に特化するだけでなく，その相互の連関から新たなダイナミズムも生まれた．

これだけではない．著者は，1970年代から2000年代の東アジアと中東との経済関係を「オイル・トライアングル」の形成と発展という観点からとらえ，これが世界経済の発展径路を本質的に変化させたとしている．オイルショック後の世界において大きな地域間貿易不均衡は，大きく言えば，①東アジア4か国と中東，②東アジアとアメリカにあった．オイル・トライアングルは，欧米諸国が，東アジア4か国に対する貿易赤字を対中東貿易黒字で相殺し，東アジアの一人当たりGDPの上昇を支え，欧米が世界経済で中心的地位を維持することを可能とした．そして，世界の格差は，近代史上初めて，西洋と非西洋ではなく，オイル・トライアングルの受益者か否かに依るようになったという．

さらに著者は，冷戦体制や自由貿易体制によって繁栄した東アジア経済圏が，中国の政策転換によって規模が拡大したこと(工業化のフロンティアの拡大)，1970年代以降日本が「メカトロニクス革命」によって労働節約的かつ人的資本集約的工業化へと向かったことを指摘する．興味深いのは，回復してきたアメリカ経済の対東アジア輸出の拡大であり，アメリカ経済の内部がアジア太平洋経済圏に属して成長する地域が出てきたと著者は言う．同時に，冷戦後にアメリカ経済が金融化したことによって作り出された国際経済循環は，結果としてアメリカの覇権国家性の依存，中国の大規模な資源開発と資本集約型工業化，そして資源節約的な技術発展を主導してきた日本の停滞を招き，東アジア発展経路の「屈折」を導いたとしている．アジア太平洋経済圏の発展に依存し，停滞の続く日本にとって，現在は重要な岐路の局面に立たされており，そのためにも叡知の結集，すなわち広い視野を持った知識人の養成が必要であると著者は説いている．評者もこの点に深い共感を覚えた．

Ⅲ.

工業化は温帯で興り，近代技術は温帯に伝播してきた．著者は，熱帯にふさわしい持続可能性に配慮した開発問題を地球規模で議論すべきだと最後の章で述べており，グローバル・ヒストリーにおけるアジアのみならず，環境経済史という分野へも視野を広げている．エネルギーや移民といった今日的問題も，欧米の歴史の中にだけあるのではなく，アジア的でもある．その意味でも，本書には未来へのメッセージも込められている．

著者の視点は一貫して俯瞰的であり，工業化が国境を越えたように，国境を越えた東アジアという地域が地域内での相互作用を進めつつ，世界経済にいかなる影響を持ったのかを鮮やかに描いている．そのためには，ある種の単純化やモデル化が必要であるが，著者のそのスキルは見事としか言いようがない．特に，膨大な貿易データを駆使しつつコンパクトな図式化がなされている点は，reader-friendly であり，著者特有の鳥瞰的な視点を強く感じた．

若い頃評者は，戦前の日本における「情報のインフラストラクチャー」の構築という著者独特のとらえ方に感銘を受け，「杉原先生は，なぜこのような視点で物事をまとめることができるのですか？」と，今思えば不躾な質問をした．著者は「SOAS で外国人に教える時に，どうやったらわかってもらえるか考えたからだよ」と，寛大にも笑いながら答えてくださった．確かに，英語で表現するときには，細かすぎる説明よりも，注意深くポイントを押さえ確固たるストーリーをわかりやすくしなければならない．英語で論文を書く時には，いつも著者の言葉が胸にある．日本語においても，然りである．

しかし，日本経済史を専門とする評者にとっては，日本の歴史的経験がやや相対化され過ぎているという印象も否めない．もちろん，一国史的な日本経済史が良いという意味ではない．東アジアの中でも日本が最初に工業化した意味や戦後の東アジアにとって雁行形態の先発たる日本が果たした役割が，やや過小評価されている印象を受ける．また，著者が議論するように「東アジア繊維複合体」が比較優位にもとづいてうまく機能したのならば，なぜ日本の繊維産業がスムーズに構造改革を実現できなかったのかという疑問が残る．換言すれば，東アジアという地域全体の成長動向が，日本の工業化や産業に与えた影響をより深く知りたかった．しかし細かい実証研究は，本書を手がかりとして筆者や挑戦的読者に与えられた課題なのかもしれない．

日本を含む東アジアが，グローバル・ヒストリーにどう位置づけられるか．本書の刊行に刺激を受け，さまざまな専門領域の研究者が著者の問題提起を受けて実証的に研究し，議論が深められていくことだろう．そのためにも，次の課題として，この本の英語版の出版を評者は強く希望する．これは，すでに著者によって進められているかもしれない．本書が，一日も早くグローバルな公共財になって欲しいと切に願う．

付記：昨年，目を傷めたことから，書評が遅れたことをお詫びしたい．経済研究所学術出版室の故・羽生朋子氏には，辛抱強く待っていただいた原稿を直接お渡しすることが叶わなかった．遥か昔，一橋大学の院生時代から長きにわたって私を励ましてくださった彼女に，深い哀悼の意を捧げる．

［橋野知子］